令和三年度　学校文集【令和三年十月】

ひらやま　八号

※　今回は、県読書感想文コンクール入賞作品と、青の国若山牧水短歌大会入賞作品です。

【県読書感想文コンクール】

佐作　「そのとき」が近づくように　二年　布井　奏多

ぼくは本やに行って「そのときがくるくる」という本を見ました。ひょうしになすの絵がかいてありました。ちょうど学校でなすをそだてていて、「だいめいのそのときってどんなときだろう。」と思ったので、この本を読んでみました。

この本には、たくまという小学一年生のなすぎらいな男の子が出てきます。きゅうしょくになすが出ると、のこしてしまいます。夏休みにおじいちゃんの家にとまりに行くと、おじいちゃんが心をこめてなすを作っていけばたくまはおじいちゃんは、とてもおいしそうになすをたべていました。

しかしたくまは、なすがきらいだったとわかりました。おばあちゃんとけっこんもむかしはなすがきらいだったとそのときがくるよ。」おじいちゃんが言ったことになったそうです。

「いつかきっとたべられたくまんだんして、おばあちゃんがはりきってなすを料理をつくれたからおいしくたべられるときというのとき」とそいうのは、なすをたくまもそれを聞いてそのとき」は来ていませんでした。

「そのとき」がくるまでのたくまは、やっぱりまだ「そのとき」がくると思いますぼくにも、たくまと同じように、ゴーヤというにがてなたべものがありますぼくだから、ゆう気を出してたべてみたくまはすごいなと思いました。

きっとたくまには、これからもいろいろなことにチャレンジして、そのときがくるときどきゴーヤをたべることにしたいです。

もうぼくが思ったことは、「そのとき」というのはたべることのこけでは、ないということです。たとえば、さか上がりです。年長さんのころ、ぼくはさか上がりができませんでした。けれど、「できるようになりたい。」と思って、練習しつづけました。すると、だんだん足が高く上がるようになって、ついにできるようになりました。

これからも、いろんな「そのとき」がくるのがたのしみです。

佐作　サンドイッチクラブを読んで　六年　谷川　このか

わたしは、「サンドイッチクラブ」という本を読みました。この本を選んだきっかけは、この本を買うまえに、少し読んでみて、これがいいかも、つづきがきになる。と思ったからです。

この本は、桃沢珠子という主人公の物語です。この桃沢珠子は、あまり勉強が得意ではない人です。そして珠子は、砂像を作る羽村ヒカルと勝田葉真とのたたかいをみて「このままじゃいけない。自分自身をかえなくちゃ。」と思った珠子は、羽村ヒカルとペアを組んで砂像作り対決をすることになりました。

わたしがこの本を読んで、特に心に残ったところは三つあります。

「あたし、一つ目は、珠子のかた先からヒカルが、桃沢さんと友達になりたい。」と言ったところです。

わたしは、なぜか切実な感じがしました。

「○○さんと友達になれてよかった。」と言わなぜなら、わたしも珠子と同じように、「○○さんと友達になりたい。」と言われたほうが、同じ友達でもにごりがなく、強く感じたからです。

二つ目は、珠子とヒカル、それぞれの呼び名が「タマゴ」と「ハム」なところです。

わたしは、このシーンに思わず笑ってしまいました。

「フフッ。なにそのあだな。へんなあだなだね。」なぜなら、もしわたしが珠子と同じような立場だったらと考えると、と言うだろうと思うからです。

三つ目は、夏休み最後の日に、勝田葉真対ヒカル、珠子ペアで砂像作り対決の最中のヒカルと珠子のチームワークがいいところです。

わたしは、こういうチームワークがいいなと思いました。なぜなら、「チームワーク」がいいと声をかけ合ってアドバイスしたり、テンポがよく、いつもの時間よりも早く終わらせることが、できるからです。

わたしは、この本から「チームワーク」というものは、すごく大事なことなんだということを学びました。

これからは、友達と何かを協力してするときには、「チームワーク」を大事にして取り組んでいきたいです。

※　紙面の都合上、佐藤あんじさんの作品は次号で紹介します。

【青の国若山牧水短歌大会】

佐作

つゆの日のひびいてきえる雨の音がわたしの耳にきれいにのこる　四年　児玉　愛結

夏の海海の向こうに入道雲いくつになっても乗るのを夢見る　六年　吉田　葵